キリスト教ワーシップダンスの実態と意義に関する一考察

― 踊り手の体験に関する質的調査から ―

河田 真理（お茶の水女子大学大学院）

Study concerning the state and meaning of worship dance in Christianity

—From a qualitative research for the narrative of dancers regarding of their experiences—

Mari KAWATA（Ochanomizu University）

Abstract

In recent years, worship dance has been popular in the Christian community in the West. It is a dance that worships God in various ways by people expressing their love to God. This article examines the state and meaning of worship dance in Christianity through a qualitative research on dancer's narrative.

It was concluded from the narratives that the following are the dancer's experience in worship dance: "losing themselves by the Power of God","the purification of the awareness of sin and the renewal of the heart","harmony —a regulating balance of mind and energy on the inside and outside of the self"and "unification of people starting with an individual and personal unification". It was also evident that the Bible suggests the importance of dance in worshiping God and that it is the source of inspiration for dancer's creativity, reflecting the reality of a dancer bearing hardship and sin.

In this aspect, the significance of worship dance lies in being in harmony with one's inside, finding the state of harmony with the outside world, and reinforcing the Christian faith of a dancer by experiencing the world of Bible through dance.

要 約

現在、欧米のクリスチャンコミュニティを中心に、神への礼拝として「ワーシップダンス」が行われている。ワーシップダンスとは、神への愛を表現しようとする者によってあらゆるスタイルで踊られる、礼拝としてのダンスである。本研究は、ワーシップダンスの実態とその意義を考察することを目的として、踊り手の体験に関する語りから質的調査を行った。

その結果、次のことが明らかになった。ワーシップダンスにおける踊り手の体験とは、「脱我」「罪意識の浄化と心の一新」「調和―自己の内外の気やエネルギーのバランス」「"個"の統合から始まる"個と個"の統合」であった。また、キリスト教の信仰の土台である聖書は、礼拝における身体の動きの重要性を示唆していること、さらに、聖書は単なる歴史物語ではなく、苦難や罪による葛藤を抱えた踊り手の現実を映しだす、ダンス創作のインスピレーションの源泉となっていることが明らかになった。

これらのことから、ワーシップダンスとは、自己の内面における調和、また外界―自分を取り囲む不可視なものとの関係における調和した在り方の模索という意味において、また聖書の世界と踊り手の現在が融合することによる信仰の強化において、意義があると考察した。

キーワード：ワーシップダンス、身体、聖書、教会、SCAT

1．はじめに

1－1　ワーシップダンスの概要

1－1－1　ワーシップダンスめぐる状況

現在、欧米のクリスチャンコミュニティを中心に、神への礼拝表現として「ワーシップダンス」とよばれるダンスが行われている。それは、「礼拝者の心からうまれるダンス」（McDonald, 2007：85）として、神への信仰心に基づいて踊られ、その形態は「聖書的伝統に基づいた、あらゆる世代の個人や会衆による自発的な礼拝表現から、緻密に演出されたパフォーマンス的なものに至るまで多彩」（Coleman, 1995：8）である。

ところで、神への礼拝表現として「ワーシップダンス」という言葉が用いられ、クリスチャンコミュニティにおいて定着するようになったのは、20世紀以降のことである。一般に、キリスト教はダンスに対して否定的な態度をとっていたように思われがちであるが、実際のところは、聖書時代から初期キリスト教時代にかけては、「踊りを持って、御名を賛美せよ。タンバリンと立琴をかなでて、主にほめ歌を歌え。（詩篇149：3）」という聖書箇所が示すように、ダンスを用いて神を礼拝することが奨励され、「教会そのものの内部でも初代の教父たちは踊りの形式と内容が聖なるものである限り、宗教的儀式の中に踊りを用いることを認めた」（石福，1964：47）のである。しかし、その本質上理性を超越する傾向にあるダンスは、次第に猥雑さや狂気的性質を帯びたものとなり、中世において禁欲が強調され始めると、踊る者は「悪魔的」（小寺，1974：67）とみなされ、礼拝における神聖なダンスはますます影を潜め、葬列を除くあらゆるダンスと行列は廃止され、シェーカーと呼ばれる一部の宗派により保持された他は、聖職者によるひどく儀式化されたダンスのみが残ったのであった（Coleman, 1995）。

しかし、舞踊史におけるモダンダンスの誕生が、キリスト教における現代のワーシップダンスの起こりの発端となり、ルース・セント・デニス（Ruth St.Dennis, 1877-1968）ら、モダンダンスの先駆者たちによる教会内でのダンス普及活動を通して、キリスト教において再びダンスが容認されるようになった（Daniels, 1981）。その後、ワーシップダンスは欧米を中心に広く普及し、東南アジア、韓国にまで拡がり、近年では日本を含め30以上の国々で実践されている。

写真1　Ruth St.Denis in "The Masque of Mary," 1934 at Riverside Church

1－1－2　ワーシップダンスの実践形態

表1は、筆者が欧米で行った3件の現地調査[i]及び文献調査から、現在のワーシップダンスの実践形態を示したものである。表1のとおり、ワーシップダンスの実践形態は極めて多様であり、参加者・場所・形態・表現内容・ダンスのジャンル・音楽・衣装・小道具は、国や宗派、各コミュニティの性格によって異なる。したがって、現代のワーシップダンスは、神への礼拝として捧げられるものでありながらもその実践形態については極めて自由度が高く、宗教的なダンスとしては稀な特徴をもつダンスであるといえる。そのため、多様なワーシップダンスの内に通底するものを見出すためには、外面的な行為のみを見つめるのではなく、踊る者の「内側」に着目することが必要であると思われる。

1－2　研究の意義と目的

キリスト教に馴染みの薄い日本ではワーシップダンスに関する学術的研究は稀であるが、欧米では神学者、ダンス関係者、心理学者、言語学者等の間で様々な視点から議論されている。特にこれまでの先行諸研

表1　ワーシップダンスの概要

項目	内容
形態・踊り手	自発的な即興表現（踊り手：会衆全員） 定型のダンス（踊り手：会衆全員） 作品形式のダンス（踊り手：一部の会衆がパフォーマーとして踊り、他の会衆は観賞）
場所	教会、大聖堂、劇場、地域の集会所、学校、刑務所、病院　等
表現内容	神への信仰心（神への思い・イメージ）、祈り（願い、感謝、癒し等）、聖書の哲学・物語
ジャンル	モダンダンス、コンテンポラリーダンス、クラシックバレエ、ジャズダンス、 民族舞踊、ヒップホップ、サインダンス（手話）、即興
音楽	ワーシップソング（現代風にアレンジされた賛美歌）、聖歌、クラシック音楽、現代音楽
衣装	特に規定はなく、実践形態や表現内容により異なる。 （衣装の色については聖書的意味が施される場合がある。）
小道具	バナー（垂れ幕）、フラッグ、リボン、スカーフが多用される。

究においては、歴史的・聖書的視点を中心に議論されてきた。コールマン（1995）は聖書時代以前の古代イスラエルにおける伝統的なダンスから、中世においてダンスが排斥された時代を経て、現代のワーシップダンスに至る歴史について論じ、ダニエル（1981）は、その伝統的な役割について、「神への信仰表現」、「聖書の解釈と表現」、「コミュニティの結束」であったと論じている。また、宗教と芸術の分野の学者であるアダムズ（1983）は、聖書の視座からワーシップダンスの意義について論じ、ダニエル（1981）の見解に「過去や自分自身への執着からの解放」を加えている。このように、ワーシップダンスに関する示唆に富む検証の蓄積により、歴史的・聖書的にその意義が明らかにされている。

また、ワーシップダンスの実践研究については、大まかに２つのアプローチにより研究が進められている。一つは、「何が行われているか」という実態へのアプローチである。シルバーリン（1995）やバウアー（1990）は、ワーシップダンスの具体的な方法や表現形態について検証を行っている。一方、「どのように行われているか」を問う実体験へのアプローチにおいては、野澤（2010）が社会学の見地から、キリスト教礼拝における信者間のやりとりにみられるトランス的な行為が発生するメカニズムを「相互行為の構造」と捉え、それは個人の没入行為がそれに関与しようとする他者との相互的な自発性により成立するものであると論じている。また、デマリニス（1990）は、ブラジルのある少数民族のクリスチャンコミュニティにおける儀式的円ダンスの機能について医療的視座から検証し、各人がエネルギーの解放と集中を繰り返すプロセスを通して、個人の“内”と人との“間”に存在するエネルギーの「バランス」と「つながり」を認識することであると論じている。

このように、ワーシップダンスの歴史的背景や伝統的な役割、実践内容については検証が進められているものの、ワーシップダンス実践における踊り手の実際的な体験内容については報告がない。「宗教の外的形式は内的な意識からのみ理解できる」（G.ファン・デル・レーウ, 1979：238, 以下Gと表示）のであり、ワーシップダンスという現象をより深く理解するためには、当事者の「内的な意識」を把握する必要があるだろう。それは、ワーシップダンスの外面的な行為のみから判断することは難しく、実践者にその内実を聞きとる必要がある。

そこで本研究では、ワーシップダンス実践者の語りから、ワーシップダンスにおいてどのような体験をしているかについて検証と考察を行う。それによって、ワーシップダンスの実態とその意義を明らかにすることを目的とする。

2．調査方法

2－1 調査の概要

本稿で取り上げる7名のワーシップダンス実践者は、みなキリスト教を信仰するクリスチャンであり、教会あるいは教会外の各種集会で、聖書に基づく独自のダンス観に根ざしたワーシップダンスを行っている。本研究では、2種類のデータ[ii]から検証を行った。

①ロサンゼルスの黒人教会（Glory Christian Fellowship International、以下、GCFI）で行われたワーシップダンスの参与観察を実施（2007年）。「会衆全員による即興的なダンス」における、中心的な踊り手の発言内容のメモと録音を実施。その後、録音内容を翻訳し、トランスクリプトを作成した。

②国際的なクリスチャンダンス組織（International Christian Dance Fellowship、以下、ICDF）のダンス講師4名に対して半構造化インタビューを実施（2009年）。「半構造化インタビュー」という形式を選定した理由は、GCFIの調査結果（①）を質問内容に反映させることで、国や文化を越えて通底するワーシップダンスにおける踊り手の体験内容を把握したいと考えたためである。インタビューは1名につき1～2回、時間は1回につき、30分～2時間程度であった。質問項目の大枠は次のようなものであった。現在、教会内外で行っているダンス実践の内容とそのダンス実践を行うに至った経緯、ワーシップダンスにおける身体や感情の変化、教会でのワーシップダンス実践による礼拝環境や会衆の反応、等であった。インタビューはすべて英語で行われ、得られたデータについては各協力者に許可をとった上で録音し、その後、録音内容を翻訳し、トランスクリプトを作成した。

なお、これら2件の調査に加えて、GCFI・ICDFのホームページや各講師とのメールでのやり取りや各講師のダンス実践に関する独自の理論がまとめられた出版物[iii]も分析の参考にした。

2－2 分析手順

質的データ分析手法の1つである、SCAT（Steps for Coding and Theorization）とは、大谷尚により開発され、現在、教育学、看護学、経営学、スポーツ科学その他の様々な領域で活用されている。この手法の背景には、グレイザーとシュトラウス（Glaser, B. G. & Straus, A. L.）によるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）や木下康仁による修正版―グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）等の方法がある。これらの方法とSCATとの違いは、本来のグラウンデッド・セオリー・アプローチが長い期間と大量のサンプルを必要とするのに対して、SCATでは少数のサンプルに対しても適用できるよう修正されている点、また、分析手続きが明晰であり、その手続き（4ステップのコーディング）自体に言語分析を支援する仕組みが内包されているため、「SCATの手続きに従って作業を進めることで、それに無理なく導かれて、分析を完結させることができる（強調河田）」（大谷, 2011：156）、という点である。SCATのもつこうした特徴は、分析の恣意性を極力排除することにもつながるのではないかと思われる。以上がSCATを本研究の分析手法として採用した理由である。

SCATでは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉～〈4〉の4ステップのコーディング[iv]を行い、主に〈4〉で記述した構成概念を意味のつながりをもたせてストーリーラインをつくり、データの潜在的意味を再文脈化する。その後、ストーリーラインを断片化して理論を記述し、関連資料を参照しながらデータの分析結果を検討する（大谷, 2011）。本研究でも、これらの段階に沿って分析を進めた。尚、分析の対象とした7名の内の4名（ICDF）は、1名ずつインタビュー調査を行ったため、1名ずつマトリクスを作成して分析を行い、残りの3名分（GCFI）は3名の会話を1つのマトリクスにまとめて分析を行った。紙面の都合上、本稿では、3名の発語データの分析結果のみを示した（表2）。

表2　SCATによるＪ，Ｋ，Ｔ氏の発語データ分析結果

番号	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念
1	お互いに励まし合い、影響し合いましょう。私たちはここにいる全員の方々とつながりをもちたいのです。	互いに励まし合い、影響し合い、つながりをもちたい	互いに影響を与え、励まし、つながる	共同体的生き方	影響、個と個のつながり
2	個人としてではなく共同体として生きていることの結果として奉仕(ダンス)がうみだされる。私たちはいつも互いのために存在してる。	共同体として生きている、互いのために存在している、奉仕	互いのために存在している、仕える、共同体としての生き方	踊り手の自己感、ダンスの意味	互いのために存在しているという自己感、ダンスは共同体的生き方の体現
3	人生の山は神が置いてくださったものであり、あなたが踏みだして乗り越えようとするなら、神は必ずそれぞれに必要な備えをも用意してくださる。	人生の山、踏み出して乗り越えようとする	人生の試練、動きだす意志	ダンスの意味	人生の困難を乗り越える意志とエネルギーの奮起
4	ワーシップダンスはこの世的なステップを取り入れるのではない。あなたを通して何かが注がれるものなのです。	この世的なステップを取り入れるのではない。あなたを通して何かが注がれる。	既成の動きを取り入れるのではない。満ち溢れてくるもの。	動きのインスピレーション	満ち溢れてくるもの
5	音楽を聴くとそこで自分がとらえられて動きがわかる。注がれるとそういうしるしが出てくる。	自分がとらえられて、動きがわかる、注がれる、しるし	注がれるとは何かにとらえられること	動きのインスピレーション	満ち溢れてくるもの、自我・自意識の後退
6	霊が動いているから情熱が動き、私の身体が動かされるのです。	霊が動く、情熱が動く、身体が動かされる	気・エネルギーの象徴としての聖霊の作用の動的イメージ、情熱が動く、受動的に動かされる	動きの原理－外界からの刺激を感覚する	気・エネルギーを感じる、自然に動かされる感覚
7	神が動くように命じられる。聖霊が私を通して働かれる。聖霊に敏感でなければならない。聖霊が動くまで私が動かないときもある。いつ動くべきかがわかる。歩行みたいなもの。どういう動きにしようかなんて考えない。	動くように命じられる、聖霊が私を通して働かれる、敏感、いつ動くべきかがわかる、歩行みたい、考えない	聖霊(気・エネルギー)に敏感な感覚、歩行みたいに自然な感覚	動きの原理－外界からの身体の作用を知覚する	自我・自意識の後退、考えるのではなく感じる
8	人生の試練の時、まず最初に神のことを思ってください。人生の中で神がどのように働いてくださったか、どのような御方かを認識してください。	人生の試練、神がどのように働いてくださったか、どのような御方かを認識	今感じているもの、記憶、イメージの想起	自分との対話－感情、内的イメージ	自己との対話、今感じているもの、記憶、イメージに集中
9	聖霊さま、あなたを歓迎します。	聖霊さま、歓迎します	聖霊(気・エネルギー)、感じる	動きの原理－外界からの刺激を感覚する	気・エネルギーを感じる
10	子どもの頃、親の腕の中で完全にすべてを委ねて安心して眠っていたときのように、完全なる安心を味わいなさい。	親の腕の中で、完全に、委ね切って安心した状態を味わいなさい	抱かれる感じ、委ね切る、安心した状態を味わう	自己との対話－身体感覚	心地よい身体感覚を味わうこと
11	神よ。ありがとうございます。私が語る前にあなたは私の秘密や思いを知ってる。(…)爆発してください。あなたが私の中にうみだしたいものをうみだし、解き放ちたいものを解き放ってください。	私の必要や思い、必要、爆発してください、うみだしたいものを、解き放ちたいものを解き放ってください	人に言えない感情(罪意識)、訴え、爆発、解放	自己との対話－感情、解放	罪意識の浄化と新生

ストーリーライン (現時点でいえること)	ワーシップダンスの踊り手は互いのために存在しているという自己感を抱き、ワーシップダンスの目的の１つは互いに影響し合うことによる、個と個のつながり、すなわちそうした「共同体的生き方の体現」にある。そして２つ目の目的は「人生の困難を乗り越える意志とエネルギーの奮起」、３つめは「罪意識の浄化と再生」である。また、踊り手の動きのインスピレーションとは、'注がれる'イメージであり、その時踊り手は内に満ち溢れてくるものによる自我・自意識の後退した状態にある。動きの創出プロセスとは、自己との対話、すなわち、今感じているもの、記憶、イメージに集中することや、心地よい身体感覚を味わうこと、そして、外界からの刺激の受容－すなわち、気・エネルギーを感じることである。踊り手はこのとき、考えるのではなく感じるのであり、また、感じるという意識はありつつも自然に動かされる感覚が共存しているという二重の感覚が共存した状態にある。
理論記述	・ワーシップダンスの踊り手は互いのために存在しているという自己感を抱いている。 ・ワーシップダンスの目的とは「共同体的生き方（個と個のつながり）の体現」「人生の困難を乗り越える意志とエネルギーの奮起」、そして「罪意識の浄化と再生」である。 ・踊り手の動きのインスピレーションとは、'注がれる'こと、すなわち内に満ち溢れてくるものによって自我・自意識の後退した状態にある。 ・動きの創出プロセスとは、自己との対話、すなわち、感情、記憶、イメージや、身体感覚に集中すること、そして、外界からの刺激の受容―すなわち、気・エネルギーを感じることである。 ・踊り手は、感じようとする意図（能動性）と自然に動かされるという感覚（受動性）が共存した状態にある。

3．調査結果と考察

7名のワーシップダンス実践者から得られた語りを分析した結果、ワーシップダンスにおける踊り手の体験は、「脱我」、「罪意識の浄化と心の一新」、「自己の内外の気やエネルギーの調和」、「“個”の統合から始まる“個と個”の統合」という4つのカテゴリーに集約された。また、ワーシップダンスとは、聖書の言葉や思想を源泉としてうみだされた実践であるということが示唆された。以下、ワーシップダンスにおける踊り手の体験（3－1）、ワーシップダンスをうみだす源泉としての聖書（3－2）、の順に調査結果と考察を述べる。なお、踊り手による語りは“**ゴシック体**”を用いて例示した。

3－1　ワーシップダンスにおける踊り手の体験

3－1－1　脱我

ワーシップダンスは、多くの場合、“**まず礼拝をする。神の平安に入る**(N)”ことから始まり、その過程で踊り手は“**人生の中で神がどのように働いてくださったか、どのような御方かを認識**(J)”する。そのようにして、神に対して抱くイメージや感情を想起・認識することによって、“**まっすぐに神に向かい**(N)”、心を集中させるのである。では、こうした行為によって踊り手の心身にはどのような変化が生じるのだろうか。N氏は次のように述べている。“**大抵は渇いた状態から胸がいっぱいになる感じで涙が出る。時には熱く感じる。時には心臓がすごく高鳴る。ただ震えを感じることもある。なぜなら神の力を感じるから。**”また、この他にも、“**ハグ、それは誰かにハグされたような感じ**(A)”“**かつてないほどの喜びと昂揚感を味わった**(P)”という語りがみられた。このように、踊り手は身体の動きを通して「他の力の侵入」を感じ、包まれるような温かさや喜びの感情による「満たし」、胸が熱くなる、涙が出る、心臓が高鳴る、震えを感じるというような「興奮」状態になる。こうした状態は踊り手を“**自分を忘れ、自意識から解放された**(P)”状態、すなわち「自我・自意識が後退した状態」へと誘い、“**どう動くべきかといちいち考えない**(P)”で、“**こう動くようにとからだが感じる**(A)”というように、自分がまるで何者かに動かされているような体験を生じさせる。

これらのことから、踊り手は、神に対して抱くイメージや感情の想起・認識・集中によって、「他の力の侵入」、平安や喜びの感情による「満たし」、「興奮」、「自我・自意識の後退」によって、自然に動かされるような感覚が生じるという体験をしていることがわかる。G.ファン・デル・レーウは、宗教現象におけるこうした体験について、「脱我の中には、つねに何か強制的なもの、自己の力の内への他の力の侵入がある。(…) 脱我に対応するのは熱狂、すなわち神によって満たされることである。宗教現象が精神異常と違うのは、ヌミノーゼの力に満ちを譲るために、自己の生が後退することである」(G, 1979：240-241) と述べており、前述した踊り手の体験はG. ファン・デル・レーウのいう「脱我」の具体的な在り様に相当すると考えられる。したがって、ワーシップダンスにおける踊り手の体験の一つを「脱我」ととらえることができる。

3－1－2 罪意識の浄化と心の一新

礼拝とは、神の「聖さ」を畏れる行為であり、礼拝者は自分自身の罪や人間的な弱さに対して自覚的になり、それらを告白し、訴え、浄化しようとする思いを掻き立てられるような状態になることがある。T氏は、ワーシップダンスの際に次のように祈った。“**私が語る前にあなた〔神〕は私の秘密や思いを知っている。あなた〔神〕は私の必要を知っている。その導きを感謝します。大胆さを、明確さを感謝します。爆発してください。あなた〔神〕が私の中にうみだしたいものをうみだし、解き放ちたいものを解き放ってください。(…) 落胆、疑い、同性愛… すべて無くなることを宣言します。**”このT氏の祈りは、人には言えない感情や罪の意識を、ダンスの動きを通して大胆に爆発的に表現することによって、心と身体が解放され、新たな感情や生きるエネルギーがうみだされることを願う思い、すなわちダンスによる「罪意識の浄化と心の一新」を願う祈りである。ア

ダムズは身体の動きと思考の変化との関係について次のように論じている。「身体の動きは、心を新しい動きに関する他の思考で満たすことのないまま、先の思考から焦点をシフトさせ、(…) ダンスにおいて心は解放され、新しい考えや新しい意図へと導かれる」(Adams, 1983：71)。つまり、身体の動きには、心を「浄化」し、新たな思考をうみだす「新生」の性質があるといえる。これらのことから、ワーシップダンスとは苦しみや罪の意識の浄化と、新たな意図や生きるエネルギーをうみだす新生の体験であるということができるだろう。

3－1－3　自己の内外の気やエネルギーの調和

踊り手は、動きを創造するプロセスを「聖霊」との共同作業であると捉えている。聖霊とは、聖書では「息」「風」を象徴する霊的な存在であり、目に見えない、自分を超えたある力であるという意味では、「気」や「エネルギー」に相当する言葉と捉えることができるだろう（小野寺，2003：39)。K氏は聖霊の作用と動きの関係について次のように述べている。**“聖霊が私を通して働かれる。聖霊に敏感でなければならない。聖霊が動くまで私は動かないときもある。”** つまり、K氏はダンスにおいて聖霊の作用を敏感に知覚しようとする受動的な状態にあるといえる。しかし、その状態はまったくの受動態なのではなく、**“いつ動くべきかがわかる**(K)”**“動かされると思うこともあれば、そう信じてるけど自分が動いてる**(M)”というように、動きに対する自覚的な意識が共存した状態である。したがって、踊り手の動きは、受動と能動の相互作用、すなわち、外側から知覚される「気」や「エネルギー」と内側から生み出されるそれとのバランスを調整することによって成立していると考えられる。またその状態とは、何かに憑かれて失神してしまうような奇妙な状態ではなく、**“歩行のようなもの**(K)”、**“奇妙な感じではなくてとても自然**(A)”な状態、すなわち**“調和**(P)”のとれた状態として認識されている。したがって、ダンスの動きにおいて踊り手が感じる受動と能動との相互作用とは、外界とのコミュニケーションを通して調和のとれた自己の在り方を模索する、**“人生を生きるための訓練**(M)”として、踊り手が自己の外側と内側の「気」や「エネルギー」のバランスを調整し、調和を見出そうとする体験であるといえるだろう。

3－1－4　“個”の統合から始まる“個と個”の統合

踊り手は、ダンスを“個”の統合（霊・魂・身体が統合された状態）であると捉えている。また、そうした状態は“個”の領域を超えて他者へと波及し、“個と個”の統合という体験を生じさせる。

3－1－4－1“個”の統合

踊り手は、ダンスを、霊・魂・身体の統合された人間本来の完全な状態であると捉えている。M氏は、その必要性について次のように述べる。**“当時〔教会でのワーシップダンスを始める前〕、人々はただ話す、考えるだけだったけど、ダンスは霊・魂・身体のすべて。それを人々が経験することはとても価値があると思った。”**つまり、ダンスを否定してきたキリスト教の伝統的な礼拝は、言葉や思考に偏った精神偏重型の傾向があり、M氏は、そのような礼拝の風潮を変革するための手段として、霊・魂・身体の統合された状態としてのダンスを用いる必要性を感じていたのである。では、なぜ礼拝において、霊・魂・身体が統合された状態にあることが重要といえるのか。N氏は次のように説明している。**“人間とは全体的な存在（Whole being)。霊・魂・身体で完全な人間。聖書では、ヘブライの起源に基づいて、霊・魂・身体を分けていない。”**このことから、人間を霊・魂・身体の統合であるとする思想は、聖書の人間観に基づく思想であると推察できる。聖書は「あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けることのないように（Ⅰテサロニケ5：13)」という聖句が示すように、心身の二区分とは別に、「人間の心の内奥にあって神の作用を受容できる場所」として「霊」を加え、人間を「霊・魂・身体」の三区分でとらえている（金子，2003)。踊り手はこうした理解のもと、**“神は私たちを完全**

な人間として創造された(N)”のだからこそ、“**私たちは神の前に完全な人間であるべき**(N)”という思いから、礼拝において神の前に完全な状態であること、すなわちダンス―霊・魂・身体の統合された人間本来の姿―であることが重要と考えるのである。

3－1－4－2 “個“から“個”への影響

J氏は、ワーシップダンスの実践中に、会衆に対して次のように呼び掛けている。“**お互いに励まし合い、影響し合いましょう。私たちはここにいる全員の方々とつながりをもちたいのです。**”この言葉から、ワーシップダンスにおいて踊り手と観客が互いに“個”の領域を超えて影響し合い、つながることを願うJ氏の思いを読み取ることができる。では実際に、踊り手と観客との間にはどのような「影響」がみられるのだろうか。P氏は、次のように述べている。

“**私が踊った後に、一人の女性が私のところに来て言った。彼女は人生でとても深い傷を負い、神の愛というものを今までに感じたことがなかった。でも、私が神の深い愛と神の聖なる守りとを動きと物とで表現したことによって、彼女は神がその腕で彼女を包むのを感じ、初めて神の癒しの愛を経験した。これまで非常に深く彼女の心を傷つけた人のことを赦す心をもつことができた。**”

このように、踊り手の表現から観客に様々な質感の身体の状態感が伝達されることによって、観客の感情は変化し、観客は自分自身の内に新たな感情が生起していることに気づく場合がある。特にそれが、負の感情からプラスの感情へと変化し、何らかの心の縛りを解き放つような場合には、心の癒しにつながる可能性があるといえるだろう。また、“**観る者の心に触れること**”は、P氏にとって“**〔ワーシップダンスを〕これまで続けてきた原動力**”になっている。したがって、踊り手と観客との影響関係は双方向的なものであるといえるだろう。教会というコミュニティは、単に「儀式を共に捧げるための集まり」なのではなく、人々がその苦しみや弱さを互いに告白し、癒しを求め、共に祈り、励まし合うという、極めて密な「交わり」をもつコミュニティである。そのなかで、ワーシップダンスにおいて“個”から“個”へと互いに影響し合うことは、“**互いのために存在している**(J)”ことを現実に体験する行為となっているといえるだろう。

3－1－4－3 “個と個”の統合

踊り手と観客とがダンスを通して互いに影響し合うということは、互いの間にどのような関係をもたらすのか。踊り手は、“**心の状態を共有**(N)”、“**この喜びを共有**(P)”、“**私が感じるイキイキとした感覚を共有**(A)”するということが人々の“**つながり**(J)”や“**結束**(M)”をもたらすと述べている。つまり、イメージや感情、身体から溢れだすエネルギーを他者と共有するという体験が、一体感を生じさせるということ、すなわち“個”と“個”の統合をもたらすのである。この統合とは踊り手と観客の統合であるとともに、踊り手同士、または会衆同士の統合であるといえるだろう。

教会という場は、「神との交わり」の場であるとともに、「人と人との交わり」の場であり、人種、世代、性別を問わず、様々な背景をもつ人々が集う特殊なコミュニティであるがゆえに、“**様々な国から人々が集まるとき、言語の違いが大きな壁となる**(M)”ことがある。だからこそ、言葉にならないものを共有し、“個と個”が統合される体験としてのダンスは、“**それ〔壁〕を超える**(M)”という意味においても価値のある体験であるといえるだろう。

3－2 ワーシップダンスをうみだす源泉としての聖書

7名の踊り手の語りには、しばしばワーシップダンスの実践が聖書に基づくものであることを示唆する表現がみられた。では、聖書のどの様な性質がワーシップダンスをうみだす源泉となっているのだろうか。

3－2－1 「礼拝」「ダンス」の語源的意味

A氏は、聖書における「礼拝」という語の語源的意味について、**“歌、楽器の演奏、そして身体の動き、の3つの意味を含む”**と述べる。また新キリスト教辞典（1985）では、聖書には礼拝表現としての動作を表す語として、「仰ぐ、ささげる、手を上げる、ひれ伏す、ひざまずく、身をかがめる」といった多様な表現がみられることが示唆されている。このことから、「礼拝」とは本質的に身体の動きを含む行為であり、聖書は礼拝における身体動作の重要性を示唆していると考えられる。

では、聖書には「ダンス」についてどのように記載され、またどのように位置づけられているのだろうか。聖書には、実際に踊るという行為を表すダンス（以下、「事実上のダンス」）と、何らかの意味の象徴としてのダンスと、ダンスという語は使用されていないが広い意味でダンスの状況を示唆する語がみられる。P氏は**“聖書は、礼拝に伴うダンスの記述で満ちている”**と語り、他の踊り手もダンスの場面を示す聖書箇所について、章・節・記述内容までをスラスラと語る様子がみられた。表3は、3名の踊り手（M, A, J氏）から得られた、ダンスに関する聖書箇所を示している。

表3　ワーシップダンス実践の根拠となっている聖書箇所

番号	発話者	聖書箇所	記述
①	M, A	Ⅱサムエル記6：14	ダビデは、主の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。
②	A	出エジプト記15：20	アロンの姉、女預言者ミリヤムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを持って、踊り手ながら彼女について出てきた。
③	A	詩篇149：3	踊りをもって、御名を賛美せよ。タンバリンと立琴を奏でて主にほめ歌を歌え。
④	A	詩篇150：4	タンバリンと踊りをもって神をほめたたえよ。緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。
⑤	A	ルカ15：25	兄息子は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえてきた。
⑥	J	詩篇30：11	主は私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。
⑦	J	詩篇141：2	私の祈りが、御前への香として、私が手を上げることが夕べへのささげ物として立ち上りますように。

筆者は、表3に示した7つの聖書箇所における「踊り」や動作を表す語について詳しく検証を行った。アダムズは、旧約聖書におけるダンスの語源的意味から、礼拝としてのダンスの重要性を論じ、旧約聖書においてダンスを意味するヘブライ語のなかで特に重要な言葉として、「מָחוֹל , מחלה , מח」（Adams, 1983：24）を挙げている。表3の②詩篇149：3、③詩篇150：4、⑥詩篇30：11の聖句における「踊り」は「מָחוֹל」（machol: 英）が用いられており、ここでは「神をほめ讃える行為」としてのダンスを意味している。また、②出エジプト記15：20の聖句にみられる「踊り」は「מחלה」（mecholah：英）が用いられ、この語もまた、神をほめたたえる行為や喜びを伴う踊りを意味する。また、「מח」（chul：英）とは、「מָחוֹל」（machol：英）や「מחלה」（mecholah：英）の語根であり、円状の踊り、回転、高度に活発な動きを特徴とする（河田, 2007）。この他、①Ⅱサムエル記6：14の「踊った」という語と⑦詩篇141：2の「手を上げる」という動作を意味する語は、「מָחוֹל , מחלה , מח」とは異なる語であるが、文脈から神への感謝や捧げものとしての踊り（動作）を意味していると推察される。このように、旧約聖書においてダンスを意味する重要な語は、「神を礼拝する行為」を表し、礼拝としてのダンスの重要性を示唆しているといえる。したがって、このことはワーシップダンスの実践における重要な根拠となりうると考えられる。

3－2－2　インスピレーションの源泉―聖書の世界と現実との融合―

A氏は、聖書の物語からインスピレーションを得た瞬間のことについて次のように述べている。

“聖書に出てくる長血の女（…）その女性はキリストに近寄って、触れた。私にはその全場面のイメージがみえた。

その女性は人混みをかきわけ、あの人〔キリスト〕こそ私を癒す人、どうしても触れたいと思った。(…) キリストは振返り女性の方をみて、あなたは癒されましたと言った。彼女はおののくばかり…。私は何度も聖書を読み返し、ほとんどいつも泣いた。そしてこの部分を解釈したい、ダンスで表現したいと思った。"

これは、「長血」といういわゆる不正出血を患う女性が、キリストこそ病を癒す方であると信じ、その裾に触れ、キリストはその女の切なる信仰から病を癒した、という場面であり、聖書の『マルコ15：25-34』に記述されている。A氏の語りから、A氏はこの女の状況に何らかの苦しみや問題を抱えた自分自身の状況を投影し、この女と同じ思いで癒しを期待し、喜びを感じているように思われる。つまり、A氏にとって、聖書は史実ではなく、まさに踊り手の「現在」を映し出す鏡であり、「これから」を生きる希望であると捉えることができる。

また、聖書の登場人物は、現在を生きる我々と全く同じように人間的な弱さを抱え、苦難や罪による葛藤の人生を歩んでいる。聖書は、その状況においてリアルに働かれる神とその人物との関係を、漠然とした空想話ではなく、現実的な事象として描き、聖書を味わう者がその事象を自分の人生に適用して受け止めるときに常に新しい気付きを与える書物である。それゆえに、聖書の題材やその信条を反映したダンス作品は、宗教的な領域にとどまらず、20世紀モダンダンスを代表する舞踊家の作品においても数多くみられる。アダムズ（1992）は、20世紀を代表するモダンダンサー[v]による聖書の題材に基づいた作品において、聖書は単なる史実としてではなく「振付家が生きる現在」を表現するためのモチーフとして用いられ、それは時代への鋭い批評として、また次に起こる事象への予兆として機能しうる可能性をもつと論じている。

これらのことから、聖書は人間の現実を映し出し、新たな気付きを与える書物として、ワーシップダンス創作のインスピレーションの源泉となっていると考察される。

4．結論

ワーシップダンスにおける踊り手の体験とは、「脱我」、「罪意識の浄化と心の一新」、「自己の内外の気やエネルギーの調和」「"個"の統合から始まる"個と個"の統合」であった。それは、自己の内面とのコミュニケーションにおいて、また、自己の外側に存在する不可視なもの（気やエネルギー）を介する他者とのコミュニケーションにおいて、調和のとれた自分自身の在り方を模索する行為であると考えられる。

また、キリスト教の信仰の土台である聖書は、礼拝における身体の動きの重要性を示唆し、礼拝としてのダンスに関する記述が豊富にみられることから、ワーシップダンス実践の根拠となっていた。さらに、聖書は単なる歴史物語ではなく、苦難や罪による葛藤を抱えた踊り手の現実を映しだす、ダンス創作のインスピレーションの源泉となっていることが明らかになった。まさに、聖書を源泉としてうみだされるワーシップダンスとは、聖書の世界と踊り手の「現在」との融合であるといえるだろう。

このように、ワーシップダンスにおける踊り手の体験を検証することによって、現代のキリスト教会におけるワーシップダンスの実態が明らかになり、それは踊り手の内面における調和と、自分を取り囲む不可視なものを介する他者との関係における調和において、また聖書の世界を実体験するという意味での信仰の強化において、意義があるといえるだろう。「教会」とは国や文化を超えてあらゆる人種、老若男女が集う場であり、ある意味で「社会の縮図」としての機能をもちうる。したがって、教会で行われるワーシップダンスの実態とその意義を検討することは、ダンスの宗教的（根源的）機能と社会的機能に関する新たな知見を見出すことにつながるのではないかと思われる。

今後は、ワーシップダンスに関する語りのデータの収集と分析を再度行い、本研究で得られた知見の普遍性を検討していく必要がある。また、本研究で得られた踊り手の内的体験と、実際の踊り手の動きにみられ

る表現特性との関連についても検証と考察を行う必要がある。これらのことを通して、「ワーシップダンス」という現象の実態と意義を明らかにするとともに、ワーシップダンスに通底する普遍的意味を浮かび上がらせることができるのではないかと考える。

注

i）1件目はブラックアメリカンのキリスト教会、Glory Christian Fellowship Internationalにおけるワーシップダンスイベントであり、2件目はクリスチャンのコンテンポラリーダンスカンパニーである、Springs Dance Company（英）のワークショップ、3件目は国際的なクリスチャンダンス組織、International Christian Dance Fellowship（以下、ICDFと表記）が主催するワークショップである。

ii）GCFIにおけるワーシップダンスの踊り手を対象とした理由は、ロサンゼルスで開催されたクリスチャンの礼拝音楽に関するワークショップでGCFIのダンスリーダーであるJanalyn Glymph氏の指導を受け、ワーシップダンスに関して理論・実践ともに豊富な知識と経験を有していると思われたため、調査の対象とさせていただくことにした。また、ICDFにおける4名の踊り手は、国際的なクリスチャンダンス組織の設立者や中心的な指導者であり、ワークショップにおける指導の仕方や、それぞれの独自の出版物やホームページから、ワーシップダンスに関する実践と知識を豊富に有していることが明らかであったため、インタビュー調査の対象とさせていただくことにした。

iii）Nicola Baartse, vesa nova-movement meditation Ⅰ, Australia : 2009.
Paula Doushett, The Sacred Dance Group, Spiritual principles of our life and work, England : 1985.

iv）〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考えて付していく。

v）ロイ・フラー（Loie Fuller）、ルース・セント・デニス（Ruth St. Denis）、テッド・ショーン（Ted Shawn）、マーサ・グラハム（Martha Graham）、ホセ・リモン（José Limón）、ポール・テイラー（Paul Taylor）等

文献

Adams, D., 1983, *Congregational Dancing in Christian Worship*, Sharing Co.: Austin, 71.

Adams, D. & Apostolos-Cappadona, D. ed,1990, *Dance as Religious Studies*, The Crossroad Publishing Company: NY,1990.

Adams, D., 1992, "Biblical Criteria in Dance: Modern Dance as Prophetic Form", Choreography and Dance, harwood academic publishers: UK, 13-18.

Baur,Susan., 1990, "Dance as Performance Fine art in Liturgy", *Dance As Religious Studies* , The Crossroad Publishing Company: NY, 167-183.

Coleman, Lucinda., 1995, "Dance in the Church", Renual Journal, Queensland University of Technology: Australia.

Daniels, Marilyn., 1981, *The Dance In Christianity –A History of Religious Dance Through the Ages*, Paulist Press: America, 73.

De Marinis, Valerie., 1990, "Movement as Mediator of Meaning: An Investigation of the Psychological and Spiritual Function of Dance in Sacred Liturgy", *Dance As Religious Studies*, The Crossroad Publishing Company: NY, 193-210.

Gerardus van der Leeuw., 1961, *Eimführung in die Phänomenologie der Religion*, Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn.

G.ファン・デル・レーウ：田丸徳善／大竹みよ子訳, 1979,『宗教現象学入門』,東京大学出版会：東京, 240-241.

石福恒雄, 1964,『舞踊の歴史』, 紀伊国屋書店：東京, 47.
金子晴勇, 2003,『人間学から見た霊性』, 教文館：東京.
河田真理, 2013,「ダンスをうみだす源泉としての聖書―Doug Adamsの論考を中心に」,『人間文化創成科学論叢』, 第15巻：53-61.
McDonald, Stine., 2007, *DANCE! ACCORDING TO THE SCRIPTURES*：Unites States, 85.
野澤豊一, 2010,「米国黒人ペンテコステ派教会の礼拝における音楽的行為に関する研究　―音楽のコミュニケーションについての試論―」,『金沢大学大学院人間社会環境研究科博士論文』.
小寺融吉, 1674,『舞踊の美学的研究』, 国書刊行会：東京, 67.
小野寺功, 2003,『聖霊の神学』, 春風社：神奈川, 38-43.
大谷尚, 2011,「SCAT : Steps for Cording and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法―」,『感性工学：日本感性工学会論文誌』, 第10号3巻：155-160.
新改訳聖書刊行会訳, 1981,『聖書』いのちのことば社：東京.
Silberling, Murray., 1995, *DANCING FOR JOY -A Biblical Approach to Praise and Worship*：America, 22.
Taylor, M.N., 1997, "Shout in: the dance of the black church", UMI Dissertation Service.